

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひとも、よしあしということのみもうしあえり。聖人のおおせには、「善惡のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。

後序 「わが御身にひきかけて」 —呼びかけと命令—

第13組 名願寺住職

名畑 格

text by Itaru Nabata

つねのおおせ

唯円は親鸞の「つねのおおせ」を「つね」に聞かれていた。親鸞在世の出来事としてだけでなく、現在のおおせとして聞きとどめておられた。親鸞自身がつねに言われていただけでなく、唯円自身がつねに聞いていた。いや、おおせはただの1回だけだったかもしれない。しかし唯円はつねのおおせとしてつねに聞いていた。「つね」は時間性のことでなく真理性をあらわす。

唯円は、親鸞の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」との述懐を、善導の機の深信と受け取り、「金言に、すこしもたがわせおはしまさず」と聞く。しかもそれ

だけでなく、善導の言葉も「～身としれ」と呼びかけと命令として聞く。そのことを受けて、自身の「身の罪惡の深きほど」と「如来の御恩の高きこと」を知らないで迷える有り様を「おもいしらせ」るためと聞く。親鸞一人の自覚も善導の自覚も、唯円にとっては呼びかけであり、命令であった。

唯円が「～と知れ」と聞き、二つの「知らず」を通して「迷える」自分に出会い、「おもいしらせんがため」と唯円自身に思い知らされる時、その唯円の自覚が、私達に「～と知れ」という金言として聞こえているかどうか。

真宗の伝播

師の自覚が弟子に対する呼びかけとなり、命令となる。命令がそのまま弟子の自覚となる。平野修先生は『民衆の中の親鸞』の中で、「「勅命」とは、有無をいわさぬ命令のことですが、別にそういう命令が如来より下るという意味ではなく、自分自身が迷いの業の身だという目覚めは、まったく否定することのできない、いってみれば、有無をいわせないほどに真実なものであって、あたかも勅命を受けたようなものだ、という意味です。」と言われる。「真実に生きよう」という呼びかけの前に師の自覚と意志がある。むしろそれしかない。「ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべし」もまた、師の意志のみである。その「～しよう」という意志が「～なさい」という命令と聞こえ、その命令を聞いた親鸞の「～しよう」という意志に変わる。「不真実の私だからそれを照らしだす真実に生きよう」という師の目覚めと願いがまわりの者にとって呼びかけと命令になる。呼びかけは命令にまでならないと呼びかけ自身を成就しない。なぜなら命令は呼びかけが聞こえた者に属するからである。真宗の伝播はそこにしかないのである。

信心問答

唯円は「おおせにてなきことをも、おおせとのみもうす」ことについて、「相論をたたかいかたんがため」と、そこに名利心を見ておられる。また歎異抄の異本では「相論をたたんがため」と、問答を断ち切るためにおおせを使う異義者の様子が語られる。相論に勝つためと断つためという、どちらも唯円の嘆きが聞こえてくる。おおせが呼びかけと命令という意味を失い、名利心によって使われ、教条的に利用されるとき、問答の場は失われる。「そらごと」よりも「ひとつついたましきことのそうろうなり」と、注意される唯円の心を念う。